

## 配偶者を呼ぶことば (2)

— 夫から妻を —

遠藤 織枝

はじめに

前号で、妻から夫を呼ぶことばを考察し、特に、その種の語として現在最も一般的とされている「主人」の歴史的推移、現在における役割り、位置づけなどを見てきた。その出発点は、「主人」が夫を呼ぶことばとして適切かどうか、中でも日本語教育で教える言葉としてこれが最も妥当かどうかの疑問からであった。

その同じ疑問は夫が妻を呼ぶことばとして代表的なものとされ、日本語教育教科書の多くが採用している「家内」にもあてはまる。ここで、夫から妻を呼ぶことばの歴史的流れと、現状を調べて、はたして「家内」が最も適切であるかどうかを考えてみた。

### I

前号で紹介したように「主人」については新聞で特集記事を組んだり、テレビでとり上げたり、母親大会のスローガンになったりと、いろいろ論議がなされているが、「家内」について改めて論議されたということは寡聞にして知らない。夫婦の呼び方の調査の中でそれに触れられたものとして『言語生活』（86年7月号）の米田正人氏の報告がある。

米田氏は、妻の留守中に電話が、A. 恩師から、B. 友人から、かかってきて妻の不在を告げるときの夫の呼び方をアンケート調査し、その結果として次のような数字を示している。

米田氏はこの解説で、次のように述べている。

「夫の場合は一つの回答への集中は妻の場合ほどでなく、いくつかの形にわかれています。中でも多いのは『〇〇(名前)』『家内』などです。『家内』は友人の場合より恩師の場合の方が使う率が高くなっていますが『〇〇(名前)』は逆の傾向を見せています。年齢との関連でも同様で、『家内』は高齢層に多いのに対して、『〇〇(名前)』は若くなるにつれて使う率が高くなっています。

(表1)

場面		呼び方	○(名前)	家内	女房	妻	うちの	省略	その他	計
		○	○							
電話を告げ不在	A. 恩師に対して	38 20.5 (%)	68 36.8	11 5.9	24 13.0	6 3.2	25 13.5	13 7.0	185 100 (%)	
	B. 友人に対して	55 29.7 (%)	39 21.1	12 6.5	0 0	15 8.1	29 15.7	35 18.9	185 100 (%)	

主語の部分を言わずに済ませる人の率もかなりあります。『妻』は恩師に対して、若い層に好んで使われるようです』

アンケート調査であって、実際に使われている場からの採集ではないこと、場面が電話と限っていることなどの制約はあるが、改まった場合の高年齢層で「家内」、若い層で「妻」、親しい相手には○○と名前を言う人が多い、という大まかな傾向が示されている。

外国人に日本語を教えるための日本語教科書では次のようになっている。(下線遠藤、以下同じ)

①『日本語教科書初級』(早稲田大学語学教育研究所、1985)

(わたしの、弟の、家内の) 主人、家内。(あなたの、あのかたの、…さん)のご主人、おくさん。(p.246)

②『日本語初歩』(国際交流基金、1984)

わたしはおととがあります。

わたしはつまがあります。

あの人はごしゅじんがあります。p.198

③『Japanese For Busy People』(国際日本語普及協会、1984)

Kuraku : Kinō kanai ni morai mashita. p.111)

④『生活日本語』(文化庁、1983)

(子供)が風邪をひいて寝ているんですが…の( )の置き換え語として

「主人、家内、母、父」を提示。(p.189)

⑤『日本語の基礎』(海外技術者研修協会、1979)

家内が日本へ来ます。(p.128)

②以外はみな「家内」で、現在の日本語教育の場で、夫が妻を呼ぶ語として多くは「家内」が教えられていることがわかる。

「家内」について作家黒井千次氏のエッセイに次のような一節がある。

なんとなく具合が悪く、もう少しうまい呼び方がないものか、と思いつづけている言葉がある。

夫婦が一緒にいて、いずれか一方だけが知っている人に会った場合、自分の妻なり夫なりをどう呼んで相手に紹介するか――。

一般的には、他人に向かって夫は妻を「家内です」と紹介し、妻は夫を「主人です」と言って引き合わせるだろう。年齢によって違いはあるかもしれないが、わが周辺ではそれが普通であるようだ。

しかし、ぼく自身は「家内」という言葉にどうしても抵抗を覚え、うまく口から出て来ない(中略)。

別に誰かから、「家内」という言葉は怪しからん、といわれたこともなければ、非民主主義的である、などと抗議をうけた覚えもない。にもかかわらず、こだわりを捨てきれない(中略)。

一方では、その言葉には最早リアリティーがないのではないか、との疑いもある。

「家内」には家の内にあり、家を守ってとりしきっている者、といった含みがあるだろう。当然その前提として、家の外で働き金を稼いでくるのは夫なのである。

しかし、今の妻の多くは、忙しくてあまり家の中にはいない。ショッピングもあれば、カルチャーセンター通いもある。テニスもすれば、地域活動の主体ともなる。勤めをもって働いている人は、もちろん、パートタイマーとして仕事する人も少なくない。

としたら、そういう妻たちを指して、これがうちの「家内」です、と呼ぶのはおかしくないか――そんな気がしてしまうのだ(後略)。(「北向きの窓から」

— 妻は家内か、『朝日』86. 6. 1)

ひごろ、実際に使う側の立場から、黒井氏は「家内」にもはやリアリティーがないのではないかと、こだわっている。

ここで、やはり前号で見たのと同じように妻を「家内」と呼ぶようになった歴史をみていこうと思う。

## II-(1) いつから「家内」か

### II-(1)-a 漢和辞典では

「家内」は漢語であるから、漢和辞典をまず引いてみる。『大漢和辞典』（大修館1971）には

家内⊖一家の内。又、一家の中に居る者。

家族。家人。〔宋書・殷琰傳〕休祐歩入朝家内猶分停壽陽。

⊖妻。家妻。

とあって、⊖には漢籍の出典と用例が明記されているが、妻を表す方の⊖には出典がない。

『中文大辭典』（台湾・中華學術院1974）には

家内 謂一家之内也。

ることは記されていない。『辞海』（上海辞書出版社1979）『辞源』（中国・商務印書館1979）には「家内」の語自体が記載されていない。中国の国語辞書に、妻を表す「家内」の語はないのである。

を表す「家内」の語はないのである。

『字源』（簡野道明1923）には

家内。いへのうち。又、家族＝家人。

○国 己の妻。にょうぼう。

と記されている。「国」の記号は、凡例によると「我国にて造りし文字にして広く世間通行せるもの」とある。「我国にて造りし文字」とあるから国字を指すものと思われるが、この「家内」の記述は文字の説明をしているものではない。第一義「いへのうち」は漢籍にもある中国由来のものであるが、第二義「己の妻。

にょうぼう」は「我国にて造りし語義」とでもいうつもりで、「国」の記号をつけたものと思われる。

『角川古語大辞典』（角川書店 1982 以下『角川』と略記する）は  
家内（名）①漢語、家の中。またそこに住する人。家族。②妻、一家の主婦と  
しての妻。

と、①は漢語だが、②はそうではない旨区別されている。

これら、中国側日本側それぞれの辞書から漢語としての「家内」には「家の中、  
家の中にいる人」の意味だけがあり、妻としての意味はなかった、日本へ「家内」  
の語が入ってから、この語に自分の妻の意をもたせるようになった、というこ  
とがわかる。

II-(1)-b 日本の古典では

それでは妻の意の「家内」はいつごろから日本で使われるようになったのか。

中国典拠が宋書であるから中国の宋代以降にこの語が日本に入ったはずである。  
宋代（960 - 1279）以降、つまり、日本の平安時代以降の古典文学で索引の利  
用できるもので調べてみた。

「枕草子」、「栄華物語」、「今昔物語」、「徒然草」、「増鏡」などには、  
「家内」の語は出てきていない。室町時代の御伽草子、狂言にも出てこない。

江戸時代になって「家内」の語は使われるようになるが、

①医師通齋「その故は生病人を療治すればその家内の者共が薬師様薬師様と言  
ふ。（「浮世物語」巻5）

②そこでその日鼠めが家内中を暴れ歩き、蔵の網戸や或は金箱の錠前などを歯  
ぶしにまかせてかじりをるじゃ。こりゃいつも家内でわるさをする鼠共じゃと  
思わせて。（鶴屋南北「お染久松色讀販」）

③「家来共、家内の者壹人も残らず縄打て」（並木正三「幼稚子敵討」）

など、家の中の意味で使われているものはあるが、妻の意のものはなかなか見当  
たらぬ。

『浮世風呂』にも「家内」は3回使われている。

④いんきょ「おれが起て家内を気をつけてあるくに、ひとりでも目のさめたや  
つがない」（前編巻之上）

⑤いんきょ「イエ、此頃は親類どもに病人がござって、家内の者が代り代りに夜伽に参るのイヤ何のかのと取紛れて暮も出しませぬて」（前編巻之上）

⑥鼓八「夫が只今は御本家から一切まかなひで、御家内お幾人。（四編巻之中）の3例見られるが、これもいずれも漢語の「家の中」の意④⑤と、「家の中に住んでいるもの」の意⑥であって、夫が妻を指すことばとして使われているものではない。

このころまでの辞書類をみってみる。平安末期の『類聚名義抄』にも『色葉字類抄』にもこの語は出ていない。室町時代の『下学集』の人倫門には

御曹子 息女 祖母 御家 叔父 婿

など家族親族間の人を指すことばは出ているが、夫と妻を表すことばは出ていない。

『邦訳日葡洋書』（岩波書店1980）にも「家内」は出ていない。

『俚言集覧』には

家内〔毛詩斯干〕室家君王〔箋〕室家ハ一家之内、家内安全。

と記されていて、家の中、家族のものゝの語義は示されているが、妻の意は記されていない。節用集類では、『五本対照改編節用集』（亀井孝、勉誠社1973）にも『天正十八年本節用集』（1581）『増補合類大節用集』（1717）『和漢音積書言字考節用集』（1717）『増補合類節用集大全』（1720）『蘭例節用集』（1815）『永代節用集』（1831）のいずれにも「家内」は出ていない。

江戸末期末文政7年（1825）に刊行された『雑字類篇』の「カ」の「家倫」の部には

家口。<sup>カナイ</sup> 一眷。百口。當房家口。累重<sup>ツツガレ</sup>。と「カナイ」が出ている。家族のものを意味する語であることはわかるが、妻の意が含まれているという指摘はない。この辞書の漢字の当て方は『国語学研究事典』（明治書院1977）に

漢字で書かれた語に対して正しい、あるいは常識的な音訓による読み方をしたものは極めて少なく、ほとんどの読み方が意識か注解になっている。ということは普通の音訓では読めない語彙が集められているということでもある（森岡健二）。

と記されているように、佳偶<sup>ヨイツルアイ</sup> 輕薄兒<sup>クワキモノ</sup> 哲婦<sup>リハツナニヨウゴ</sup>など、普通の音訓では読めない読み

方が示されている。そのことを考えると、漢字から当時の語義を類推することは  
的を得ないことかもしれないが、敢て憶測してみると「ヲ」の「家倫」の項目に  
「令眷」<sup>ラツサマ</sup>「府眷」<sup>ラツガタ</sup>など「眷」の字を当てて妻を意味する語がある。この漢字の当  
て方から「家眷」<sup>カナイ</sup>をみると、この語は妻の意を示すものであったかもしれないと  
想像はできるのである。あくまでも憶測の域を出ていないので、これは、さらに、  
当時の文献に多く当たってその当否を確かめなければならないと思う。

『江戸語大辞典』（講談社1974）には

かない〔家内〕①②省略 ③妻、女房。天保十年・閑情末摘花初中「昨晚なん  
ざおいらん各妓がわたくしどもの家内へお怨みたらだら」

と記され、人情本の用例が示されている。

次に先にも引いた『角川』の②をみってみる。

かない〔家内〕②妻。一家の主婦としての妻。胸算用四、二「いゑいゑに庭い  
ろりとて釜かけて焼引して、庭に敷ものしてその家内、旦那も下人もひと  
つに楽居して」「お国の御家老たまたま家内引つれ江戸への出府」（鹿の  
子餅）

この辞書の二つの用例は、妻とか主婦を意味するものといえるだろうか。胸算用  
の用例については、『対訳西鶴全集13』（明治書院1975）には

⑦…庭に敷ものをして、家内じゅう、旦那も召使いも一緒になって  
と「家内じゅう」の現代語訳が示されている。『日本古典文学全集40』（小学館  
1972）の頭注にも

⑧そのまわりに家内中、旦那も奉公人も一緒に飲んだり…

とやはり「家内中」とされている。さらに、『日本国語大辞典』（小学館1976  
以下『日国大』と略記する）には

かない〔家内〕①家の内。また、家族、家人、（中略）浮世草子、世間胸算用  
四、二「はや正月の心、いゑいゑに庭いろりとて釜かけて、焼火して、庭  
に敷ものしてその家内（カナイ）、旦那も下人もひとつに楽居して」（後  
略）②妻。自分の妻を謙遜していう場合が多い。和英語林集成（初版）

「Kanai カナイ 家内。ゴKanai（カナイ）サマ」雪中梅〈末広鉄腸〉

下、五「芸者などを家内にするのは不都合じゃ」多情多恨<尾崎紅葉>前三、四「他の者とは違って私の家内だ。私の家内だけは切（せめ）て格段の御詮議に預りたいね」破戒<島崎藤村>四、四「家内はまた家内で心配して」

のように記されている。ここでも胸算用の例を引いているが、『角川』の妻の意の用例としてではなく①の「家の内、家族、家人」の意を表している例として用いられている。この胸算用の例は、⑦⑧でみたとおり家中の人々が集まって楽しく飲食している場であるから『角川』の例の示し方は誤りだと言わざるをえない。『角川』のもう一例「鹿の子餅」から引いた例も、『岩波古典文学大系・笑活集』（1961）によれば

⑨誹名なくて為になる客と来て居るお国の御家老、たまたま家内引つれ江戸への出府。

が本文で、この家内も「国家老などは出府の折、家族までひきつれることがあった」と頭注にも記されているように、妻一人を引き具して出府したとみるより家族員何人かを引きつれて江戸へ出たとみる方が自然である。

なお、西鶴の用語としての「家内」は『対訳西鶴全集』の各巻の主要語句索引によると、先の『日国大』に引用されているものの他『武道伝来記』に

⑩家内を仕舞はせける

と、家族の意で使われている1例だけである。

『日国大』で妻を意味する「家内」の用例は『和英語林集成』（1867）が最も古いものとして挙げられているが、それ以前の用例として、江戸末期の歌舞伎役者三代目中村仲蔵が身辺雑記をまとめた『手前味噌』（1855）からいくつか拾うことができる。

⑪さて其年（嘉永三庚戌年）正月三日。熱田の社へ参詣して社前に額づき拝してゐながら一寸脇を見れば、中村芝蔵、家内、弟子などを連ねてしきりと拝んでゐる。（76、美濃にて海老蔵と一座する）

⑫同人のいふには、「御尤もの事なれば決して可否はいひませんが、御出立ならば、お前さんが独りでお出なさい。御家内はこの地へ置いてお出でなさるが至極弁理ならん」と、女房を人質に取るつもりとみえたり。（78、大阪にて



翫雀歌右衛門にあふ)

⑬実はもう一度帰れとの約束で御法事に万一間に合はぬ事でもあってはと存じまして家内と弟子を置いて参りましたが… (同上)

⑪の家内は、この文章だけでは、中村芝蔵の妻だけなのか、家族も含まれているのかはっきりしない。しかし⑬の家内は⑫との関連で明らかに筆者の妻であることがわかるので、そこから同じ書き方をしている⑪も妻を示すものと判断したのである。

今回、浮世草子、人情本、咄本など調べた限りで、妻を意味する「家内」の使用例はあまり採集できなかったが、『江戸の女ことば』(杉本つとむ 創拓社 1985 P.273)には「幕末～明治初年の家族間の呼び方」として、敬意で三つに分けた表に「カナイ」が記されている。

ふつう	そんけい	へりくだり
夫	ご亭主 <small>テイイン</small> (ゴ亭) 旦那(大旦那、若旦那)	ヤド、ウチ、タク ツレアイ
妻	奥様、御内室(上流) ゴ新造サマ、御家内、細君(中流) オカミサン(中の下)	妻 <small>メ</small> 、カナイ カカア(中の下)

へりくだりの「カナイ」というのは、夫が外部の者が自分の要について言及する際に使われるということで、幕末～明治初年にはそれが一般的な用語だったと杉本氏はみているのである。

明治の辞書になると「家内」は珍しくなくなる。

『和英語林集成』(初版1867)は

KANAI カナイ 家内 Family, house, household, wife

と記され、これが『日国大』の家内②に引かれているものである。

『和英いろは辞典』(1889)

かない(家内) いへのうち、いへのもの、家族、家眷、また、妻、女房

In the family, family also wife.

『新選和英辞書』（1894）

KANAI family, wife

など、家族の意のほかに妻の意が加えられている。

## II-(2) 夫から妻を呼ぶことば

前章まで「家内」に限ってその使われ方をみてきたが、ここでは「家内」の使われだした江戸中期以降、「家内」のほかに夫が妻を呼ぶ語としてどのようなものがあったかをみることにしたい。

先に引用した『江戸の女ことば』では妻をへりくだって呼ぶ語として「妻、カナイ、カカア（中の下）」の3語が示されていた。筆者はかつて江戸時代の家族間の呼び掛け語を調べたことがある。（「家族間の呼び掛け語と指示語について」早稲田大学語学教育研究所紀要22号）それは夫なり妻なりが、直接妻なり夫なりに呼びかけるときのことばを調べたもので、夫から妻に対するものとして次の語があった。

女房 女房ども 女ども 奥 こなひと ばば おばば ばあさん かか  
おっかあ かかあ 名前

この中に第三者に自分の妻をいうとき用いるものも重なりあっている。それは

女房 奥 ばば ばあさん かか かかあ

である。

また、『浮世風呂』では、妻を指す語として

かゝ、かか、山の神、女房

の4語が使われている。

『雑字類篇』では、妻を指す語として

妻 賤内 妻 婦 室 賤内

の6語が挙げられているが、一般的な妻と、夫が自分の妻に言及する際との区別はされていない。この辞書では「妻」の項目に「自称日」<sup>グサイ</sup>「賤内」<sup>グサイ</sup>「称人日」<sup>ソクサマ</sup>「尊間」<sup>ソクサマ</sup>、<sup>ナイゴ</sup>室氏と補足説明が加えられている。杉本氏の表の「へりくだり」と「そんけい」の区別に該当する使い分けの説明と思われるが、「オクサマ」以外は一致していない。

明治になって、『婦女新聞』（明治33～昭和17）では夫婦の互いの呼び方はどういなのがいいか、他人に話すときはどうか、について第243号（明治38（1904）年2月13日）～253号（同3月13日）にわたって論じられている。その「妻の三人称」と題する記事で「家庭子」は次のように述べている。

最も多いのは「家内が」「妻が」等でありませう。ある人は「愚妻が」「荊妻が」などと申しますが何だか角だって聞きぐるしいやうです。「細君が」と真面目にいふ人もあります。又ある階級では「奥が」と申します。まだあります。「カマアが」「山の神が」などです。それから親族や親しい友人間では、妻の名をいって「雪が」「花が」などと申す様です。妻の名を知らない人に対して妻の名のみを申しましても、妹のことだか、はた娘のことだか分かりませんから、その場合には「妻の花が」「家内の雪が」とか初め一度だけ妻の、家内のを付けるのもよろしい。しかし便利から申せば親族間、又は極親友間の人には妻の名をいひ、他人に対しては「妻」と呼ぶ様にするがよいかと存じます。

（253号 M 38.（1904）3.13）（傍点 原文）

このころの呼び方として

家内、妻、愚妻、荊妻、細君、奥、カマア、山の神、〇〇（名前）の9種類が挙げられ、最も多いのは「家内」「妻」だという。そして、筆者は、親しい人には妻の名で、他人に対しては「妻」で呼ぶのがいいと述べている。『婦女新聞』の規範意識は「妻」にあったようだ。

このころの文学作品ではどうだろうか。まず、森鷗外、夏目漱石、芥川龍之介の『作家用語索引』（教育社1983～、漱石の作で刊行されているのは、「倫敦塔」「薤露行」「それから」「三四郎」「坊ちゃん」「草枕」「行人」「こころ」「門」「彼岸過迄」の10作品9巻である）をみる。

この索引によれば、森鷗外が妻を表す語として用いているのは

さい、つま、しょうぼう、かみさん、さいくん

の5語である。「かない」が1例使われているが、これは家の中の意味で使われている。この中、作品中の人物が自分の妻を指す語として用いているのは「女房」「つま」「さい」である。

芥川龍之介は

さいくん つま しょうぼう

の3語である。「かない」も2回使われているが

①執筆中は家内のものもこの書齋へは入ってこない（「戯作三昧」）。  
のように、家の中、家族の意味である。この3語のうち「細君」は自分の妻を指すものではなく、他人の、あるいは一般的な妻の意である。

夏目漱石は

かみさん、さい、さいくん、しょうぼう、つま、かない

の6語である。「家内」は漱石作品の既刊の索引9巻の中では「門」に1例使われているのみである。坂井のことばで

②気がついてみると家内が子供をつれて親類へ行って留守なんでしょう。(16)  
の使用例である。他の5語も1例ずつ挙げてその使われ方をみておく。

③小供をおぶった神さんが退儀そうに向から近寄ってきた。（「それから」）

④「実はさっき妻と少しけんかをしてね。それで下らない神経を興奮させてしまったんです」（「こころ」の先生のことば）

⑤細君はお兼さんと云って器量はそれほどでもないが、色の白い、皮膚の滑らかな遠見の大変好い女であった。（「行人」の岡田の妻）

⑥角三はうちへ帰って、女房に何時の間に取られたか分からないと弁明した。（「三四郎」）

⑦平岡はこの時計を妻に買ってやったのである。（「それから」）

夫が自分の妻を指すものとして用いられているものとしては②の「家内」と④の「妻」だけである。

「女房」の使用例は既刊9巻中、「それから」に4例、「三四郎」に3例、「行人」に4例、「彼岸過迄」に4例計15例みられるが、いずれも⑥のような他人からみたことばとして使われている。

「妻」も「行人」に2例、「こころ」に3例、「三四郎」に1例、「それから」に5例、「門」に2例と計13例使われているが、⑦の例のような使い方のものばかりで、登場人物が自分の妻のことに言及する文脈で使われているものではない。

「細君」の使用例は多いが、これも自分の妻を指して表現する語として使われてはいない。

漱石の人物が自分の妻を指している語は「妻」と「家内」<sup>さい</sup>しかなく、しかも後者は1度使われているだけである。

いますこし明治期後半の作品をみていくことにする。索引には頼れないので思いつくままという恣意的な調べ方ではあるが、作家別にたどってみると以下のようになる。

正宗白鳥は「何処へ」(明41. 1908)で

⑧「妻」<sup>ワイフ</sup>は身が重いし…本当に困るよ」

⑨「帰って妻」<sup>ワイフ</sup>に聞くと…」

と主人公織田常吉に言わせている。「泥人形」(M44. 1911)では

⑩「私なんか今の女房が三度目のだが…」

⑪「この先の大東といふのは家内の一番の兄で漢方医です」

と「女房」と「家内」を使っている。

徳富蘆花の「みみずのたはごと」では

⑫妻も後影を見送って泣いた(M43(1910)12. 26)

⑬妻と鶴子と逗留中の娘とが席に出てとりもつ。(M45(1912)2. 6)

と「妻」<sup>さい</sup>を用いている。

石川啄木は短歌では

⑭妻と子と父と母とは各々に手ランプをもて暗中を来る。(M41(1908)6. 25)

⑮友も、妻も、かなしと思ふらし —

病みても猶

革命のこと口<sup>くち</sup>に絶<sup>た</sup>たねば(「悲しき頑具」M43. 1910)

と⑮では明らかに「つま」を用い、⑭もルビはないが、他の短歌でルビのある場合「妻」は「つま」と、すべてよませていることから、また、子、父、母とどれも訓でよませるものの中で用いられていることから「つま」とよんでいたものとみていいと思う。

しかし、この2首の間の明治42年に書かれたローマ字日記では

⑯Tsugaru no Umi no Kanata ni iru Haha ya Sai no koto ga ukande

Yo no Kokoro wo kasumeta (M42(1909)4. 7)

⑰Yo wa Sai wo aisiteru : aisiteru kara koso Nikki wo yomare

taku nai no da (同上)

⑱ Yo wa Haha ya Tsuma wo wasurete wa inai (M 42. 4. 11)

⑲ Setsuko kara Hagaki ga kita (M 42. 4. 18)

⑳ Kisha wa 1 jikan okurete tsuita. Tomo, Haha, Tsuma Ko……

Kuruma de atarashii Uchi ni tsuita (M 42. 6. 16)

と同じローマ字日記の中でも「さい」と「つま」の両方を使っている。啄木はまた妻を名前で「節子が」とも呼んでいる。

島崎藤村は『日国大』の用例として「破戒」の使用例が引用されていたが、さらに「家」(M 44. 1911)をみると、

㉑「家内は御宅へ参りませんでしたか」と稲垣は縁側から顔を出してたずねた。

㉒我輩などは君、三度も家内をもらった。(校長の三吉に対する発言)

㉓淡泊に限る。乃公はその主義サ——家内のことでも——子供のことも——自分のことでも。(実→三吉)

㉔君は僕の家内にも逢っておられるでしょう。家内は今郷里にいます。(榊→三吉)

と何人もの登場人物にそれぞれ「家内」と言わせている。作品中の手紙文の中では、

㉕君より妻へ宛てたる御書簡、また妻より君へ宛たる手紙ふとしたことより生の目に触れ…(三吉が要にあてた手紙)

㉖私はまだ若輩の積りでこれから大いにやろうと思っているのに妻は最早老いに入りつつあるが…そう思うと感傷の情にたえない。(正太から三吉への手紙)といずれも「妻」で表している。

「千曲川のスケッチ」(M 45. 1912)の序には

㉗二夏ほどあの山の上で妻と共に君を迎えた。…樹さん、君のお父さんも最早居ない人だし、私の妻もない。

と「妻」が二度使われている。「家」でも一般的に妻を指すことばとして「妻」はよく使われ、㉕㉖の手紙例以外はルビなしで、ルビなしのものは「つま」と読ませて区別していたと思われるので、この例も「つま」と呼んでいたとみてよいと思う。

藤村は「家内」「妻」「妻」の3語を自分の妻に言及する語として用いている

が、このあたりから、「妻」が改まった手紙文の中で使われ、一般には「妻」と呼ぶように位相の違いによる使い分けが出てきたようである。啄木の日記でも、ローマ字日記を書き始めるという昂ぶった気持ちの時は「さい」と書き、数日後には平静もとりもどしたのか「つま」と変わってきている。

また、鷗外・漱石はほとんど使っていない「家内」を藤村はよく使っている。作家による語の選択の相違の1例といえようか。

もう少し時代を降って昭和初期の数人の作家の用語をみしてみる。

徳田秋声は「あらくれ」（大4. 1915）で房吉に

㊸「そんなことがあったのか否か知らないけれど、私の家内なら阿母さんは黙って見ていたらいいでしょう。

と言わせ、「和解」（昭8. 1933）のKは、

㊹「山の神をよこそうかと思ったんだがね。あれは病院へ行ってるんだ」

と「山の神」「あれ」で妻を表している。

横光利一は「上海」（昭7. 1932）で甲谷に、

㊺「何も女房のことなんか今ごろ云わなくなつて良いでしょう」

と言わせ、戦後の「微笑」（昭22. 1947）では梶に

㊻「僕の家内もそちらに近い方ですよ」

と「家内」を使わせている。

志賀直哉は『暗夜行路』（大11. 1922）の時任謙作には、その配偶者を一貫して「直子」と名前では呼ばせている。「和解」（大8. 1919）「雪の日——我孫子日記」（大9. 1920）「焚火」（大9. 1920）「痴情」（大15. 1926）「山科の記憶」（昭2. 1927）では、

㊼ 駐車場の菓子屋に行って妻から頼まれた菓子を買う。（「雪の日——我孫子日記」）

のように、主人公は自分の配偶者を「妻」と呼んでいる。昭和2年5月「山科の記憶」までは「妻」で通ってきていたのが、同年9月「沓掛にて」では

㊽ その日私達は桂の離宮拝観をするつもりで家内を連れ、山科から汽車で京都へ来て、家内だけ急いで朝の食事をしなかつたので、駅の食堂で食事をさせ、その前で私はぼんやり烟草をのんでいると、不意に芥川君と瀧井君とが入って

来た。

と「家内」に変わっている。その後のエッセイ風のもの「万曆赤絵」(昭8. 1933)「鬼」(昭14. 1939)「末っ児」(昭25. 1950)「朝の試写会」(昭26. 1951)「夫婦」(昭30. 1955)ではいずれも「家内」である。昭和2年は志賀直哉45歳、中年に達した時期である。そのような年齢と「妻」から「家内」への転換と関連があるとみるのはどうだろうか。

堀辰雄は「卜居」(昭13. 1938)という津村信夫にあてた手紙形式の作品で  
㊤ 不便な山の中でそれに慣れこの自分とはともかく、はじめての女房にはいさ  
さか可哀そうな位だ。

と「女房」を使い、「菜穂子」(和16. 1941)「古墳」(昭18. 1943)では  
㊦ 「まあ本当に…」妻もすこし意外なような顔つきをしていた。(「古墳」)  
のように「妻」を使っている。この「女房」と「妻」は前者は親しい友人への手  
紙ということで日常語的、後者は他の文の書きことばと、同一作者による使い分  
け例とみられる。

このころになると「妻」は全く使われなくなり、「妻」<sup>つま</sup>「家内」「女房」が一  
般的な妻を呼ぶ語となっている

なお、昭和初年の夫と妻を表すことばの基本的なものと考えられた1例として  
土井光知の『基礎日本語』を参照してみる。昭和8年(1933)に土井光知が、  
「できる限り単純な、しかし何事でもはっきり言い表し得る、整理された、また  
記憶することがたやすい、基礎となるべき日本語を組織すること」を目指して発  
表した1000語の『基礎日本語』(のち1943年100語を追加して1100倍にな  
った)の「ひと」の項目には

兄、姉、相手、妹、ををち、夫、男、弟、ををば、女、子、祖先、父、妻、友、母、  
ひと、夫人、王

の19語が選ばれている。ここでは、配偶者を指す語としては「夫」と「妻」が最  
も基礎的なものとされている。

## II-(3) 現在の状況

今まで歴史的にその使われ方をみてきたが、それでは現在はどうなっているの



か、実際のことばとして使われているものを書きことばと話しことばに分けて調べてみた。

書きことばとしては、(1)新聞によるもの、(2)雑誌『暮らしの手帖』によるものと二つ調べてみた。(1)の新聞によるものは1986年1月から9月にかけて『朝日新聞』『毎日新聞』『読売新聞』『日本経済新聞』で、投書欄、人物紹介欄、エッセイなどで筆者が自分の妻を表現している語を拾った。登場人物が実際には「妻」と言ったのに記者が「家内」と書いてしまっている、というような場面もありうるが、ここでは新聞に書かれた「書きことば」として一括して考えている。こうして採集したものを表現者の年代別に表にしてみる。下の数字は「家内」「女房」「妻」の3語については、年代別の比を求めたもの。計の欄では全採集例中のそれぞれの語の使われ方の比率である。

(表2) 新聞の中の「妻」を表すことば

	家 内	女 房	妻	婆 さん	か み さん	か あ ち ゃ ん	つ れ あ い	家 の 者	名 前	計
30代	3 10.7	1 4.3	10 18.9	0	0	1	0	0	0	15
40代	2 7.1	2 8.7	9 17.0	0	1	0	0	0	0	14
50代	9 32.1	13 56.5	13 24.5	0	1	1	2	0	1	40
60代	6 21.4	4 17.4	15 28.3	0	1	0	0	0	0	26
70代 ~	8 28.6	3 13.0	6 11.3	2	0	1	0	1	0	21
計	28 24.1%	23 19.8	53 45.7	2 1.7	3 2.6	3 2.6	2 1.7	1 0.9	1 0.9	116 100%

「家内」「女房」「妻」の3語が、II-(2)の後半でみた昭和初期の傾向をそのまま引きついで中心を占めているが、その中では「妻」が最も多く、他の2語を合わせたものよりも多くなっている。

年代別にみると30代40代は採集例が少ないので、あまり断定的なことは言えないが、全体的にみて、「家内」は高齢層に多いこと、「妻」「女房」はどの年代でも使われるが「妻」の方はやや若い年代に多いことがわかる。

書きことばの(2)雑誌によるものは『暮らしの手帖』の1982年1・2月号～1986年9・10月号まで、各号の「すばらしき日曜日」という読者からの投書欄の既婚男性のものから拾った。年齢が記されていないものは、家族の構成、子供の年齢、定年後〇年などと書かれた投書内容から類推して分けた。(表3)

(表3) 雑誌の中の「妻」を表すことば

	家 内	女 房	妻	妻 君	老 妻	奥 方	ば あ さん	彼 女	計
30代	0	14	4	0	0	0	0	1	19
40代	2	8	5	0	0	1	0	0	16
50代	2	2	3	0	0	1	0	0	8
60代	1	0	3	0	1	0	1	0	6
70代～	0	0	1	1	0	0	0	0	2
計	5 9.8%	24 47.1	16 31.4	1 2.0	1 2.0	2 3.9	1 2.0	1 2.0	51 100%

ここでは中心的3語は変わらないが、その中での順位が新聞と異なり、「女房」「妻」「家内」の順である。採集したものの全体の年代構成が新聞のよりも若年の方に重点が移っていることも考える必要がある——それだけ、新聞の方の投書者や登場人物の年齢が高いということである——が、この「すばらしき日曜日」欄

の仲間うちのおしゃべり欄のような性質からも「女房」が多くなっているのだと考えられる。また、その気易さから、改まった書きことばでは使わない「奥方」や「妻君」など自分の妻を誇張してもち上げる表現も使われているのであろう。

次に話しことばの中での使われ方をみる。話しことばは、年齢、階層、職業など偏りが大きく、しかも同じような発話の中からことばを拾うためには場面の選択が非常にむずかしい。ここでは個人でできるささやかな調査として、ある理容店（埼玉県浦和市）に来るお客のことばから拾うという方法をとってみた。1986年9月5日～15日までの10日間、浦和市のA理容店の主人ご夫妻にお願いして客との会話で出てきた語を表に書きこんでいただく方法をとった。（以下R調査と略記する）（表4）

（表4） 理容店での会話から拾った「妻」を表すことば

	家 内	女 房	妻	う ち の	か み さ ん	奥 さ ん	ば あ さ ん	か あ さ ん	彼 女	計
30代	6	13	1	12	2	4	0	2	0	40
40代	3	8	0	4	3	0	0	0	0	18
50代	4	4	0	2	0	1	0	0	0	11
60代	1	1	1	0	0	0	0	1	0	4
70代 ～	0	0	0	0	2	0	4	0	0	6
計	14 17.7%	26 32.9%	2 2.5%	18 22.8%	7 8.9%	5 6.3%	4 5.1%	3 4.0%	0	79 100%

ごく限られた範囲の人による調査であるから、これで全体の傾向をおしはかるには危険が伴うが、79人の男性の中では「女房」「うちの」「家内」が上位3語であった。これを最初に紹介した米田氏の調査（以下Y調査と略記する）の場面B（友人に対するもの）と比べてみる。

Y調査では、「○○、家内、女房、省略、うちの」の順であった。電話で友人に話す場合は相手が妻の名前を知っている人であるから「○○（名前）」が一番多いのは当然だが、理容店では名前は出てこない方が普通だから、この名前の部分は除いて考える。また「省略」というのもアンケート調査では回答として出てくるが、実際使われている語を拾う場合には出てこないから、これも省く必要がある。こうして共通する部分だけ残して比べてみると、Y調査でも「家内」「女房」「うちの」とR調査と同じ語が上位3語に上ってくる。この3語の順位はY調査の場面Bでは

家内、うちの、女房

R調査では

女房、うちの、家内

で二つの調査で「女房」と「家内」が入れ替わった結果になっている。これはアンケートによる意識的な選択と自然の話の中との違い、あるいは、被調査者の階層、職業、年齢の違いなどいろいろの要素が考えられようが、どちらもそれなりに事実を示していることには違いがない。

また、Y調査の場面A（恩師に対して）では「家内」「妻」「女房」「うちの」の順であった。ここでは、改まった場合に「家内」の比率が増え、「妻」が上位に上がることがわかる。

R調査の上位3位に続いては「かみさん」「奥さん」「かあさん」「妻」が出てくる。新聞では最も多かった「妻」がここでは2例しかないのは、理容店というくつろいだ雰囲気での会話のせいであろう。このことはまた「妻」は書きことば、改まった会話ではよく使われるが、くだけた会話ではあまり使われない語だということを示している。

話しことばと書きことばの使われ方の違いとして、書きことばは上位3語に集中している（新聞で90%、雑誌で88%）のに対して、話しことばは上位3語の中での差も小さく、またこの3語が全体に占めるのは73%にすぎない。つまり、話しことばの方が書きことばより多様性に富んでいて変化しやすいということである。このことはまた、調査の時期や場所、方法を変えればかなり異った結果になるだろうことを示唆している。

## ま と め

以上、夫が妻を呼ぶ語をみてきた。

この語として「家内」が最も適切なものと一般に思われており、日本語教育でもほとんどの教科書で「主人」と「家内」で教えているが、その根拠はどこにも見出すことができなかった。この語は、妻を指す語として使われ始めたのは江戸末期で、明治期も鷗外や漱石の作品にはほとんど使われていない。明治末期の藤村の作品、昭和初期・中期にかけての志賀直哉のエッセイなどで多く使われていることから規範的な用法と受けとめられたのでもあろうか。

実際の使われ方では、書きことばと話しことばの差が大きいのが、どの調査でも「家内」が一番多く使われている語ではなかった。はじめに引用した黒井氏のこだわりも特殊なものではなかったのである。

「家内」は高年齢層の人に改まった場面で使われることが多いところから、規範的な呼び方と受けとめられているのかもしれないが、それも話しことばに限るものであり、若年層では全く別の傾向が表れているのであるからいつまでも「家内」にこだわる必要はやはりないように思う。特に若い人々を相手に行う日本語教育の場では「家内」はやはりふさわしくないといえるのである。

(86. 10. 7)